ハンガリー

ハンガリーはヨーロッパの中央部に位置しています。まわりをオーストリア、スロヴァキア、ウクライナ、ルーマニア、セルビア、クロアチア、スロヴェニアといった国々に囲まれています。首都はブダペスト、オーストリアの首都ウィーンからは列車で 3 時間ほどのところにあります。面積は約 9 万平方キロメートル、日本の約 4 分の 1 です。人口は約 980 万人、そのうち約 170 万人が首都のブダペストに暮らしています。

言語はハンガリー語（マジャル語）です。ハンガリー語は英語やフランス語やドイツ語などとは異なるウラル語族という言語グループに属しており、同じ語族の言語にはフィンランド語やエストニア語があります。ウラルという名称が示しているように、これらの言語を話している人々の祖先はもともとロシアのウラル山脈の辺りに暮らしていたのが、民族移動の結果、現在の地にやってきたといわれています。ハンガリー人はよく自分たちはアジア系であるといいますが、これは、移動の途中で中央アジアの端のあたりを通り、東方からヨーロッパに入ってきたことを意味しています。

首都のブダペストは、「ドナウの真珠」、「ドナウのバラ」と形容される、たいへん美しい町です。町の真ん中をドナウ川が流れています。西側が小高い丘のあるブダ地区、東側が平坦なペスト地区です。19 世紀末にこれらの地区が統合されてブダペストという都市が誕生しました。ブダペストという都市が現在あるような姿になったのも、だいたいこの頃です。

主な観光スポットには、ブダの丘にある王宮、マーチャーシュ教会、漁夫の砦、ペスト側にある聖イシュトヴァーン大聖堂、ペスト側の川岸に建つ巨大で壮麗な国会議事堂、ハンガリーの歴代の英雄たちの銅像が立ち並ぶ英雄広場などがあります。町のあちこちにたくさんの温泉が湧き出しています。

ハンガリーの刺繍

一口にハンガリーの刺繍といっても、
地域によって様々な刺繍があります。

ハンガリー刺繍地図

カロチャ

- 昔は白、今のようにカラフルになったのは20世紀はじめ
- 主に6色（赤、緑、青、黄、紫、ピンク）
- 濃い色と薄い色をペアにして使用
- 女性の年齢により身につける刺繍の色合いが変化する

ベーケーシュ

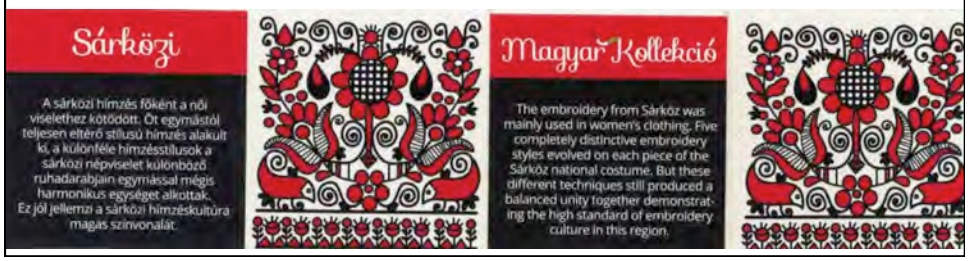
- もとは毛皮に毛糸などで植物模様を刺繍していたものを布に刺すようになった

マチョー

- 19世紀にメゼーケヴェジュドで成立
- バラのモチーフがメイン
- 黄色は太陽、黒は大地、赤は喜び、青は悲しみ、緑は哀悼を表す

シャールケズ

- 主に女性の衣類に刺繍される
- シャールケズ地方の5つの村にそれぞれ独自のスタイルがあるが、それらを組み合わせた衣装全体には調和がみられる



カロタセグ

- トランシルヴァニアのカロタセグ地方にはもっとも豊かな刺繍文化がある
- 独特の技法、自由に「書く」ように刺繍することから、イーラーショシュ（書いたようなもの）と呼ばれる
- 単色の刺繍、色は赤、青、黒、白の一色

ヴァーシャールヘイ

- ハンガリー南部の町ホードメゼーヴァーシャールヘイ周辺の刺繍
- 大きな花やツタの模様を色の濃淡により表現し、陰影をつける

クン

- はじまりはナジクンシャーグ地方で枕カバーの端に刺繍されたもの
- もっとも古い刺繍とされている
- 麻にウールで刺繍

ウーリ（貴族の）

- 16世紀に成立、17–18世紀に宮廷から貴族や富裕市民層に広がる
- 金糸や銀糸を使用
- モチーフにはトルコの影響がみられる

マチョー刺繍

マチョー刺繍はハンガリーを代表する刺繍です。2012 年にユネスコ無形文化遺産に登録されました。

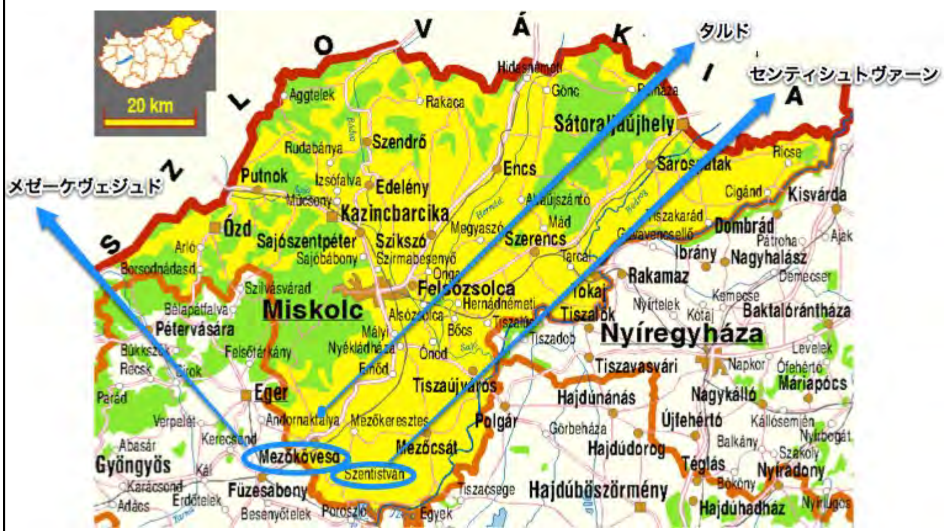
マチョーとは、マチョーの人、マチョー地方に暮らしているハンガリー人のことです。マチョーの人々は、カルバン派が多勢を占める地域のなかでは少数派のローマ・カトリック教徒です。マチョーの人々が暮らすマチョー地方は、ブダペストから東におよそ 130 キロ、ボルショド・アバウーイ・ゼンプレーン県の西部に位置し、メゼーケヴェジュド、タルド、センティシュトヴァーンの三つの町が中心地です。このあたりはハンガリーのなかでももっとも貧しい地方とされ、多くの人が農作業をして生計を立てていました。

マチョーという名称は中世の高名なハンガリー王、マーチャーシュに由来するといわれています。メゼーケヴェジュドがマーチャーシュ王により市場町の権利を与えられたこと、マーチャーシュ王自身もこの町に来たことがあることなどから、王ゆかりの町として、マーチャーシュの愛称マチョークが変化してマチョーとなったといわれています。

マチョー地方の中心地はメゼーケヴェジュドで、マチョー刺繍というと、一般的にメゼーケヴェジュドの刺繍をさすことから、本展覧会ではメゼーケエジュドの刺繍をとりあげて紹介します。

ボルショド・アバウーイ・ゼンプレーン県

メゼーケヴェジュド、センティシュトヴァーン、タルド



マチョー刺繍の歴史

マチョー地方が広く知られるようになったのは、1896 年のハンガリー千年祭のときです。当時のハンガリー国内に暮らす１２の民俗を紹介する展示のなかで、マチョーの人々の民族衣装や生活習慣が紹介されました。ブダペストの街中でマチョーの結婚式が再現されるなどして、その華やかな衣装が人々の注目を集めました。

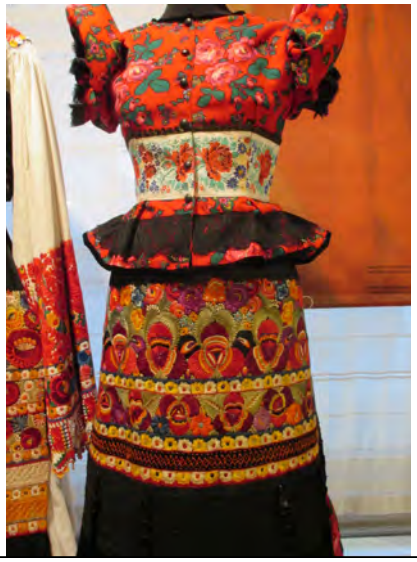
体の線をきれいに見せるマチョーの衣装は、19 世紀末には貴族の女性たちも好んで着用しました。体にぴったりとした上着、肩のところでふくらんでいる袖、フリルのついたスカート。男性の衣装も華やかで、とくにシャツは袖にたくさんのギャザーがよっており、幅広の袖先には刺繍やレースが施されています。

このようなカラフルな刺繍が施されたマチョーの民族衣装はハンガリー古来の古いものと思われるかもしれませんが、実際には 19 世紀末に形成されたものです。

現在のようなカラフルで華やかなものに変化しはじめたのは、1870 年代のことです。それ以前の古いメゼーケヴェジュドの刺繍は平織りの布のシーツや枕カバーの端に白で刺繍されたもので、パターンもシンプルなものでした。

やがて赤一色や赤青の二色で刺さされるようになり、刺繍を施すものも、男性のシャツの袖先や、シュルツ surc と呼ばれるエプロンに広まっていきました。モチーフには丸い花もようのロゼッタや鳥、「ブーツ」が使われ、これらのモチーフが横に並べられ、左右対象に繰り返されるパターンがよくみられます。

マチョーの女性の衣装



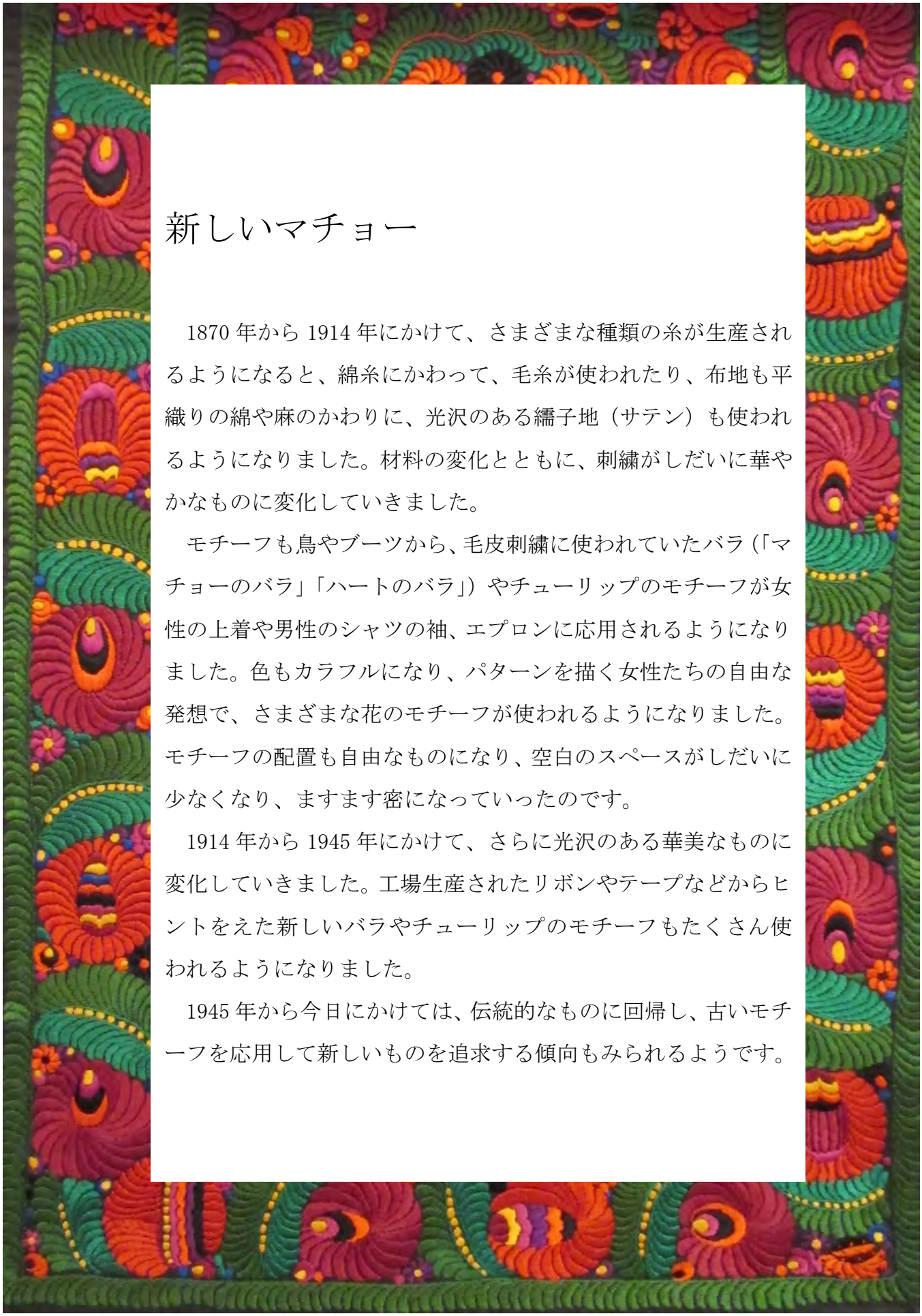
マチョーの男性のシャツ

マチョーの民族衣装

白一色のマチョー

ロゼッタ（丸い花模様）、鳥のモチーフ、
ブーツのモチーフ

モチーフが繰り返されている



新しいマチョー

1870 年から 1914 年にかけて、さまざまな種類の糸が生産されるようになると、綿糸にかわって、毛糸が使われたり、布地も平織りの綿や麻のかわりに、光沢のある繻子地（サテン）も使われるようになりました。材料の変化とともに、刺繍がしだいに華やかなものに変化していきました。

モチーフも鳥やブーツから、毛皮刺繍に使われていたバラ（「マチョーのバラ」「ハートのバラ」）やチューリップのモチーフが女性の上着や男性のシャツの袖、エプロンに応用されるようになりました。色もカラフルになり、パターンを描く女性たちの自由な発想で、さまざまな花のモチーフが使われるようになりました。モチーフの配置も自由なものになり、空白のスペースがしだいに少なくなり、ますます密になっていったのです。

1914 年から 1945 年にかけて、さらに光沢のある華美なものに変化していきました。工場生産されたリボンやテープなどからヒントをえた新しいバラやチューリップのモチーフもたくさん使われるようになりました。

1945 年から今日にかけては、伝統的なものに回帰し、古いモチーフを応用して新しいものを追求する傾向もみられるようです。

孔雀の羽模様に似ていることから
「孔雀の目」と呼ばれるマチョーのバラ

光沢のある糸で刺されたマチョーのバラ

マチョー刺繍にまつわる伝説

昔あるひとりの青年が悪魔にさらわれてしまいました。許嫁の娘はどうかあの人を返して下さいと泣いて悪魔に頼みました。すると悪魔は、「返してやろう、でもひとつ条件がある」と言いました。悪魔は、「エプロン一杯のきれいなバラをもってきたら、返してやろう」と娘に言ったのです。

時はちょうど冬、バラの花などありません。娘はどうしようかと思い悩みました。しかし、たいへん賢い娘だったので、よい考えを思いつきました。エプロンにバラの花をいっぱい刺繍してもっていったのです。これをみた悪魔は、青年を帰すしかありませんでした。以来、今日に至るまで、マチョーの娘や青年たちは悪魔除けのために華やかな刺繍のされたエプロンを身につけるようになったのです。

この話に登場するエプロンは、マチョーの民族衣装にかかせません。男性も女性もエプロンを身につけます。メゼーケヴェジュドのマチョーの人々のあいだでは、男性に婚約指輪の代わりにエプロンをおくる習慣がありました。

マチョー刺繍にまつわるエピソード

マチョー地方はハンガリーのなかでも貧しい地方として知られています。にもかかわらず、マチョーの人々はこぞって華やかな刺繍が施された衣装を身にまといました。人々はどんなにひもじい思いをしてでも着飾ることをよしとしたのです。

刺繍の材料である布や糸、とりわけ房によく使われる金糸や銀糸はきわめて高価なものでした。人々は日々の生活を切りつめてまでも、きらびやかな衣装を追い求めたのです。さらには競って金属製のキラキラした飾り物をつけるまでになりました。これに危機感を抱いた町の長老たちは教会にはたらきかけ、ついには教会からこうした光り物の装飾をつけて礼拝にくることを禁じるお達しがでるまでにいたりました。1924 年のことです。娘たちは飾り物を衣装からとりはずして、泣く泣く燃えさかる火のなかに投げこんだそうです。

図案の書き手、キシュ・ヤンコー・ボリ

Kis Jankó Bori (1876.8.27-1954.7.14) Gáspár Mártonné Molnár Borbála

マチョー刺繍の代表的モチーフはバラです。数多くのバラのモチーフを考案したことで知られているのが、刺繍の図柄を描く女性たちのなかで、もっとも有名な、キシュ・ヤンコー・ボリ（1876-1954.）です。

ボリの祖父ナジ・ヤーノシュ Nagy János（通称 Kis Jankó)は毛皮職人、両親は農民、母は町いちばんの図案の書き手でした。ボリはこの祖父と母の才能をうけつぎました。幼少期から祖父や母の仕事を手伝い、図案の書き方を学びました。15歳で結婚、6人の子どもを育てながら、図案作成に携わりました。

ちょうど新しい色の糸が手にはいるようになり、ボリも当時使われていた５色（赤、青、黄、緑、黒）に加えて、色合いの異なる赤や緑、さらに紫なども使うようになりました。またつぎつぎと新しい図案を考案して、マチョーの刺繍文化の発展に多大な貢献をしました。優れた教育者でもあり、多くの弟子を育てたことでも知られています。

第二次世界大戦後には、率先して刺繍や織物の商業生産をはじめ、1948年にはマチョー家内工業協同組合の設立者のひとりとなりました。それがやがてマチョー博物館(Matyó Múzeum)の設立へとつながっていったのです。1953 年には民芸名人(Népművészet Mestere)の称号を授与されました。

生前から自宅を訪問者に開放し、入場料をとることも、援助をうけることもありませんでした。そこは、ボリ亡き後、記念館となり、「百のバラ」をはじめとする刺繍作品とともに、当時の農民の暮らしぶりをみることができるようになっています。

メゼーケヴェジュドにはヤンコー・ボリの像も立てられました。また、1963年からヤンコー・ボリ記念賞が設けられ、毎年優れた刺繍のさし手が表彰されています。

ボリは庭で花を見ると、すぐに絵にしました。花の図柄を「夢の花」と呼び、花の夢ばかりみていました。そして、字を書こうとしても「バラになってしまう」と言っていたそうです。

マチョー博物館

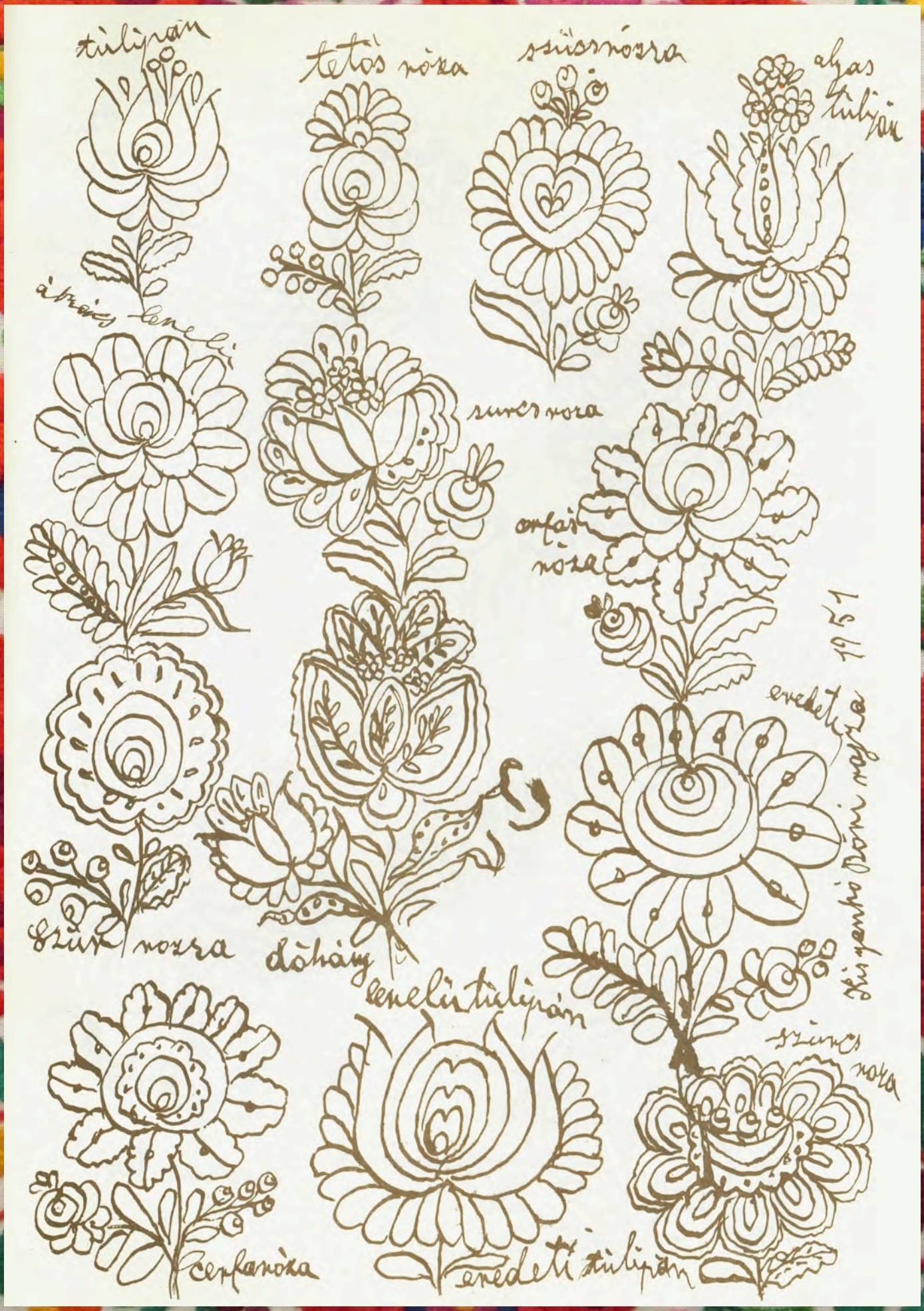
キシュ・ヤンコー・ボリ記念館

キシュ・ヤンコー・ボリ
(1876.8.27-1954.7.14)

キシュ・ヤンコー・ボリの像

キシュ・ヤンコー・ボリの作品
百のバラ

マチョー刺繍の第一人者ゼレイネー・パプ・ベル
ナデットさん　Zeleiné Pap Bernadett

今回の展覧会にあたり、ご協力いただきました。

キシュ・ヤンコー・ボリの描いたさまざまなバラのモチーフ